九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ロシアの性愛論 VI. : ローザノフ 3.

青山, 太郎
九州大学言語文化部

https://doi.org/10.15017/5503

出版情報：言語文化論究. 11, pp.77-95, 2000-03-01. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

ロシアの性愛論　VI.

ローザノフ　3.

青　山　太　郎

1

トルストイにせよ，Вл.ソロヴィヨフにせよ，ベルジャーエフにせよ，これまで性愛を論じてきたのは，各々意味合いこそ違え，いずれも性交忌避者でした。彼らは皆例外なく性行為を，汚らわしいもの，乗り越えらるべきもの，罪として思い描いてきました。彼らはキリスト教の性愛観を代弁していたのです。いっぽう人類は，無言の民衆は，黙々と，行為によって，自分たちが性交忌避者ではないことを示してきました。人々は「汚穢の内にあって」，「罪の内にあって」，「罪の理念と共に」生み続けた。彼らは詛われ，童貞へ，修道生活へ，禁欲へと呼び招かれた。しかし彼らは変わることなく生み続けた。ローザノフの意義は，彼がこの無言の民衆に代わって口を利いたことにあります。彼は，人類に生むなと言うことこそが罪であると主張したのでした。人々は生むことをやめなかった。この一事においてキリスト教は失敗した。そしてローザノフによれば，この一事において失敗したということは，万事において失敗したということなのです。なぜならこの一事こそがキリスト教のすべてであり，基底にして本質にして目的だからです。

ローザノフは1910年に『暗き宗教の光にВ темных религиозных лучах』という評論集を出しますが，これは教会とキリスト教を否定するものであるとして発禁処分に遇い，刷り上っていた2400部は廃棄されてしまいます。しかし彼はこれにめげず，翌1911年，一部削除はあるもののほぼ同じ内容を，今度は二冊の本に分けて出版しました。すなわち『暗き相貌Темный лик』と『月光の人々Люди лунного света』です。副題はどちらも「キリスト教の形而上学」となっています。この度もサラトフの主教ゲルモゲンは，宗務院への報告書で『月光の人々』に言及し，この書は異教を讃え修道制度を誹謗するものであるとして，筆者ローザノフの正教会からの破門を要求しました。しかしトルストイの破門騒ぎに懲りていた宗務院は，この度は慎重で，中々腰を上げようとしませんでした。

因みに，ローザノフが『暗き宗教の光に』を二著に分けるとき削除した一章（分量にして全体の一割弱）は，その後行方不明となり，ためにこの書は復元が叶わず，永いこと幻の書とされていましたが，最近この散逸部分が発見され，『暗き宗教の光に』は当初ローザノフが意図したかたちで，1994年ロシアにおいて出版されました。しかしここでは，『暗き相貌』，『月光の人々』という従来の分割された書名に従っておきます。おそらく，ローザノフが原著を二著に分けたのは，必ずしも検閲のためばかりではなかったと思えるからです。二著に分れたことで，個々のテーマが一層の纏りを得たという利点もあったのです。

『月光の人々』という本は，「第三の性」についての考察です。第三の性とは，男でも女でもない中間的な性のことで，これが反生殖的な無婚現象を生むのであり，修道制度もキ

リスト教もこれに由来しているというのが，ローザノフの主張です。『曖昧模糊の世界で』においてローザノフは，正教会の性愛観を批判しつつ，言わばネガティヴなかたちで性を論じていました。『月光の人々』で彼はよりポジティヴに，正面きって性を論じています。

2

無婚現象の根底にあるのは，「性交への克服し難い生来の嫌忌，すなわち，自らの生殖器を，これと相互補完の関係にある異性の生殖器と結合させることへの，傍から吹き込まれたのではない，自然発生的な嫌忌」です。自然そのものの叫びとしての「嫌だ！ 嫌だ！」――これがあらゆる禁欲的修道精神の根底にある。「性交したい！」というのは自然そのものの普遍的な叫びです。しかしそれと並んで，「性交は嫌だ！」という反自然的な叫びもまた存在する。そしてこれが反自然的と見えるのは表面だけのことで，よく見ればこのどちらもが自然そのものの叫びなのだ，というのです。

もしも性が新たな個体産出のための，雄と雌の定期的な性交から成っていたなら，性は全く明瞭な現象だったでしょう。これは天体の運行か，酸素と水素が結合して第三の新たな存在たる水を形成するのと同じようなものです。しかしその場合，自然法則のメカニズムから成る生は，何ら輝きを有しないでしょう。生の生たる所以は，それが生きていること，つまり自然法則が絶えず例外によって侵犯されることだからです。自らのうちに自然法則を容れようとしないものこそ，最初の反「自然」，反「力学」であり，「非我」と戦う「我」であり，「個性」であり，「精神」です。個性なくして世界は輝きを有しない。

男の女に対する，あるいは女の男に対するこの普遍的な「嫌だ！」は，近年に至るまで観察の対象とならなかった。十九世紀になってようやく，この方面の事実が蒐集されるようになった。その結果明らかになったことは，人間の内なる性的力，性の強度とは，万人にほぼ同量づつ行き渡った不変量ではなく，変化するもの，個々人により異るものであり，さらに個人の内にあっても不変ではなく，生涯を通じ変化しうるものだということでした。われわれの内なる性とは，「常数」ないし「不可分の単位」ではなく，ニュートン＝ライプニッツ流の数学が「流数」と名づけた次元の現象ないし数値だというのです。

この比喩は意味深い。この数値に注目した結果，ニュートンとライプニッツは時を同じくして無限小数値の計算（微分学）の発見に至り，「常数」を扱う限りにおいては死せるものであった数学が，これによって初めて生きた現象に，「永遠に流れゆくもの」に，触れる可能性を得たのでした。同様に，われわれの性別としての性が流れてやまぬものであり，不変の常数ではないことの発見は，われわれが性の内なるさまざまな偏向・逸脱・倒錯に光を当てることを可能にしたのです。

3

それにしても，性の流動的たることがかくも永いこと顧みられなかったのはなぜか。あまつさえこの分野ではとりわけ強固な道徳が形成され，性倒錯は久しく法によって裁かれ，医学による強制的治療の対象とされてきました。

性が万人に等量づつ行き渡った不変量であるという想定は，「あらゆる男は女を欲し，

あらゆる女は男を欲する」という期待を生んだ。この期待はすこぶる普遍的だったので，「あらゆる男は自らの女を，あらゆる女は自らの男を欲すべし」という道徳的要求となった。しかしこれは，「普遍的なもの」がなく，またありえない領域での「普遍的期待」が，道徳的法則のありえぬところに道徳的法則を生んだということです。なぜならこの領域では誰しも自らの姿に合せて性交するのであって，誰をも決して真似ず，また真似る必要も全くないからです。

場違いな領域へ闖入した道徳的法則は，性交を「望ましい性交」つまり「正常な性交」と，「望ましからぬ性交」つまり「異常な性交」に分けた。とはいえ，この「望ましからぬ性交」とは，これを望まぬ人々にとっては望ましくないが，これを望む人々にとっては高度に望ましいものであり，それゆえ彼らはこれを実行する。つまり道徳的法則が何を要求しようが，所詮すべてはあるところのものへ帰着するのであって，これは生理学にあっては当然のことです。ここでは万事が観察の対象であって，矯正の対象ではないのです。

「万人の普遍的期待」には，実際はこの期待から遠く逸脱した人々も，無頓着にこれに左袒するのが常でした。無頓着に，というのは，この領域そのものが内密なもので，これについては誰もが「普遍的規則」でこれを律するわけにはいかないことを知っており，またこの領域では各人が「自分だけの固有のもの」をとりわけ深く秘めているという羞恥心があり（この羞恥心を，ソロヴィヨフの言う「性的羞恥心」と混同しないこと），道徳に左袒して一切の「固有のもの」を裁くのが，この「固有のもの」を保全する最良の手段だったからです。ここから性道徳の異常な堅固さが結果した。この堅固さとは，性の内密な脆さ・不安定さに由来していたのです。

家族の美徳は男色者たちもこれを讃え，オナニストたちもオナニズムの害について書いた。教会は，男が生涯に関係しうる女は三人まで，また女がやはり生涯に関係しうる男は三人までと定め，それ以上は認めようとしなかった。しかしこうした規則は大抵誰もが密かに犯しているものであり，それゆえ誰もこれに固執してはいないのですが，偶々そのことが公言されたり暴露されたりすると，人々は「誰も組していないこと」に組して，石もてこの逸脱者を打つのです。

4

性の領域においては各人が「自らに固有のもの」を有し，各人の孕む性的緊張度は流動的であり，これにはさまざまな段階がある。ローザノフはこれを次のような自然数の連続によって表わします。

……＋８＋７＋６＋５＋４＋３＋２＋１±０－１－２－３－４－５－６－７……

このうち＋８＋７＋６とは，最大限の性的緊張，欲望充足への絶えざる渇望を表わす。最強度の雄とは，最もしばしば，最も好んで，最も強力に雌を我物とする雄であり，最強度の雌とは，誰よりも悩ましく，優しく，慎ましく雄に身を任せる雌のことです。この場合，最高度の対立こそが最強度の性を表わす。つまり，女は男に似ていなければいないほど女性的であり，男は女に似ていなければいないほど男性的です。最強度の雄は進取の気

性と独創性に富み，大胆かつ勇敢で，足を踏み鳴らして歩く。最強度の雌は静かで優しく，黙するか無口である。「世界の創造者」とは一方の元型であり，「永遠に女性的なるもの」とは他方の元型です。

ローザノフは，世の医者たちときたら性のことなぞまるで分らないのだ，と盛んに医者たちの悪口を言いつつも，性が流動的であることを示すために，クラフト＝エビングの“Psychopatia sexualis”をはじめ性倒錯に関する当時の精神医学書を広く渉猟しており，またここに自らの見聞を付け加えています。一例を挙げます。性的緊張が＋８＋７＋６であるような女性の例として，彼はロシアの著名な外科医Ｈ．И．ピロゴーフの『手記』から，ひとりの同僚の場合を紹介しています。これはローザノフが性的逸脱について初めて読んだものだそうです。

「未だ若い頃，確かリガかプスコフへの出張の折，彼（ピロゴーフ）は大学の或る同僚のもとに滞在した。この同僚は，十六歳ばかりの非常に若い女性と暫く前に結婚したところだった。同僚がピロゴーフにこぼしたところによると，同僚は妻を愛しており，彼女の性格にも満足しているが，彼女が絶えず性交をせがむため体力の消耗を感じているという。断っておくが，この同僚自身未だ非常に若く，それゆえ精力の衰える年齢ではなかった」。

もうひとつの例。或る年配の女性が，ローザノフともうひとりの作家に，彼女の若い友人の不幸を物語った。その不幸とは，Ｈ．И．ピロゴーフの同僚の身に起ったと同じものであった。

「彼は最近結婚し，自らも若く，軍人ですが，妻ゆえに殆ど病気という有様で，逃げ出すか離婚するか考えています。彼女を満足させるには，三人の夫でも足りないというのです。驚くべきは，これがまことに可愛らしい婦人であることで，満たされぬ彼女は絶えず彼を掻き立て，彼は彼女の望みを満たすことを拒否できず，どうしていいか分らないのです」。

「彼女が愛らしい女性だというのですか？」

「それはもう。普段の彼女を見れば，彼女がそんな……並外れた性欲の持ち主だとは決して思えません。しかもなんという声でしょう。あれくらい優しくて深い声の女性には，遇ったことがありません」。

ここにわれわれが見るものは，不自然に掻き立てられたのではない，自然な，深く本性的な渇望であり，これには雄としてごく当たり前な若い男のやはり自然な若い渇望も，応えきれなかったのです。このことは，或る種の雄や雌が性的力を他よりも多量に有しており，これは放蕩の結果でも，悪い教育や読書の結果でもないことを示しています。

こんにち歴史家たちがもてあましている古代史上の事実，古代エジプトや東方の「聖なる娼婦 saintes prostituees」とは，ローザノフによれば，性的力が＋８＋７＋６であるような女たちだったのであり，彼女たちこそ，他でもない，高度の性的力の発現としての「永遠の女性らしさ」を，「幽かな誘いにもなびく永遠の従順さ，あらゆる音に応える優しい木魂」を体現していたのです。「普遍的な武人」（例えば往時のノルマン人たち）がいて「普遍的な賢者」（ソクラテスやスピノザ）がいるように，「普遍的な妻」もまた存在する。彼

女たちは全世界に対し，全世界のために，花嫁として振舞う。古代エジプト人の原初の眼差しは，彼女たちを「聖女」と見てこれを敬ったのでした。のちに処女のものとされる聖性は，以前は性交に属していたのです。

とはいえ古代エジプトにおいても，「聖なる娼婦」は多くはなかったでしょう。こうした天分を有する女性は，概して少数しか生まれない。大部分のエジプト女性は，こんにちの大部分の女たちと同じ本能を有していたに違いありません。つまり彼女たちはすぐにひとりの夫を選び，生涯連れ添ったことでしょう。「聖なる娼婦」が性の＋８＋７＋６なら，彼女たちはさしずめ＋３＋２＋１です。

次いで±０がくる。彼女たちの内に雄への渇望は存在しないが，未だ雌に惹かれるということもない。声は荒っぽくなり，挙止は男のようで，煙草を吸い，低い声で話す。夫は必要ない。夫といれば退屈し，仕事へ，騒ぎへと抗い難く逃げだしてゆく。

そして最期に，純粋の負の領域が始まる。ここでは雌が雌を求める。彼女の心は同性の傍らにあって燃え立つ…

5

この法則は，もちろん男性にも当てはまります。男性の場合，性的力の＋８＋７＋６とは，例えば北方のノルマン人，剛勇をもって聞えたトルコ人，初期ローマの戦士たち，冒険へ身を投ずるコンキスタドールたちです。彼らは大地を破壊し転覆させる。しかし破壊と転覆は，不動の底土に比べれば既に文化の始まりなのです。これは岩塊を砕石へと打ち砕くことであり，この砕石を研磨することはまた別の工程であって，別の人々の仕事です。

激情は静まる。周囲にとって耐え難かった苛酷で粗野な性格の内に，共存を容易にする穏かさが現れる。つまり，＋８＋７＋６が下位の＋３＋２＋１へ移行するにつれ，「隣人」と呼べるものが出現する。また，この穏やかな段階において「結婚」が生ずる。これは男がひとりの女に執着すること，ひとりの女で満足することです。

次いで謎めいた±０が，性の完き無意志が現れる。ここでは存在の滑らかな水面が，性的渇望の波風によって乱されることはない。この種の人間は決して決闘騒ぎを起こさず，侮辱を感じない。ソクラテスは，自分は人を侮辱するよりも，侮辱を耐え忍ぶほうが容易だと言った。概してここに始まるのは「赦し」であり，「悪への無抵抗」です。観照的傾向はおそろしく成長し，エネルギーは殆どゼロにまで低下する。この性格の内には多くの月光的なもの・夢想的なものがある。これは生や事業にとっては不毛だが，文化にとっては驚くべく生産的なものであり，哲学と学問はここに開花する。

最後に±０は＋０と－０に分解し，急速に－１－２－３へ移行する。－０－１といった負の低次の段階は，「二者の友愛」という周知のかたちにおいて見られます。騒々しい気晴らしや交際を伴う「友好」ではなく，常に二人きりの，ひっそりと静かな「友愛」です。よく見ればこの二人は，その精神・習慣・性格において，はては体つきにおいてすら対称的で，あたかも相互補完の関係にあり，ここから実生活上の調和と融合が生れる。ゴーゴリは最初にこうした二極構造の光景を『イワン・イワーノヴィチとイワン・ニキーフォロヴィチ』の隣り合いで描いた。意地悪なゴーゴリは二人を喧嘩させたが，通常彼らは喧嘩しない。喧嘩する理由は何もない。ドストエフスキーの牧歌『正直な泥棒』では，弱く無

性格な酔っ払いである泥棒の面倒を，分別ある律儀な仕立屋が見る。一方は厳しく苛酷で，他方は優しく，人の言いなりになる。「まるで夫と妻，男と女のようだ」。人は彼らが女といるところを想像できない。

「これら二極構造の人物たちとは，高度の初歩的義者であり，キリスト教的義の初期の系列に属する。この系列は，その慎ましく静かで物思わしげな眼差しにより，すこぶる特殊かつ特徴的であるから，既にキリスト教の遥か以前から彼らの内にキリスト教が始っていたことに，疑問の余地はない。言い換えれば，それ自体この現象のひとつである福音書がこの流れに出逢い，これと溶け合い，ひとつの流れとなって，われわれが『キリスト教の歴史』，『キリスト教文明の歴史』，『教会史』と呼ぶものを生んだのだ」（『月光の人々』p. 57）。

6

流動する性についての以上の素描から明かなとおり，ローザノフにとって性とは，人間の生を貫いてこれに遍在するものです。言い換えれば，人間とは全身これ性の形態変化модификация であり，性の変容трансформация に他ならない。自らの性の変容でもあり，宇宙の性の変容でもある。そしてこれは当然のことです。なぜなら人間とは，父親に由来する男性的半身と，母親に由来する女性的半身から成り，これら半身が両親の性行為の内で融合したものだからです。第三のもの，性的ならざるものは，そこに入り込みようがない。われわれが性と関わりなく，「精神的に」，なにかを考えたり欲したりしたところで，はては何か反＝性的なことを企てたところで，それは性的な何かなのであり，ただあまりに変容しているため，その性的相貌を見分けえないだけなのです。

「毛虫は這い蝶は飛ぶが，その本質は同じであるようなものだ。蛹はまるで死んだように動かないが，これも同じ本質である。性行為から生じ性的部分から成る人間は，全体的にも部分的にも性的存在であり，性を，性のみを激しく呼吸している。戦闘で，荒野で，禁欲で，商売で。しかし最も純粋で聖なるかたち，最も正常なかたちにおいては，家庭で」（同上 p. 73）。

ローザノフにとって性とは，生の異名に他ならない。かつてフロイトは『性に関する三つの論文』への序文(1920)で，自分がこの論文でめざしたものは性概念の拡張であると言いました。自分の思い描く「拡張された性概念」とは，ショーペンハウエルのそれやプラトンのエロスの概念に近いものだ，と。ローザノフはフロイトを知りませんでしたが，彼もまた性を，フロイトに劣らず広く捉えていたことは事実です。

ローザノフはまた，性と宗教は根源的に同一であり一体であるとも言っています。より正確には，性と宗教は同じ本質の別の側面にすぎない，というのです。生という流れゆくひとつの河が，一方では神との関係としての宗教，天との絆としての宗教，運命と摂理の感覚としての宗教をもたらし，他方では男女の接近へ，性交へ，子作りへ，ここ地上での限りない生へと人間を惹きつける。ところがキリスト教は，他でもない，この性と宗教の結びつきを切り離そうとした。これを切り離すことで生むことの根底を揺るがせ，言わば世界の胎児に，世界の胚芽的本質に，針を突き刺そうとした。しかし成功しなかった。人類は相変らず生み続けたのですから。

キリスト教の試みは「世界の終末」の理念と結びついている。福音書の冒頭にアルファとして置かれた「処女懐胎」は，そのオメガたる終末を，カタストロフを，「最後の審判」を，「死者たちの復活」を初めから含んでいたのです。

ローザノフがめざすのは，性と宗教を再度融合させること，「生むことрождение」を再度「聖なるもの」とすることです。これはキリスト教以前の古代の天を復活させる。ローザノフの世界に終末はありません。死は最終的な死ではなく，改新の手段にすぎない。「わたし」は子供たちに内にそっくりそのまま生きるのであって，死ぬのはわたしのこんにちの名のみです。わたしの血肉は生き続け，さらに子供たちの内に永遠に生きる。死者たちが墓から出て来る理由は何らない。彼らは墓の上で，地上で，立派に生き続けているのですから。

「生むこと」が「聖なるもの」となった時，それは「教会に許可された」という虚偽のかたちではなく，自らの本質に適ったかたちを獲得するでしょう。そう考えれば，「生むこと」を抑ええない理由も納得がいきます。これは全能なるものの意志を遂行すること，「神意に適ったこと」であり，これを抑えようとすることこそ抗神の業に他ならない。

7

性交とは何か？　ローザノフはこれを，人間の「横への成長」であると言います。これはどういう意味でしょう。

胎児は母親の胎内で九ヶ月を過す。芥子粒ほどの卵子が3kgの胎児に成長するわけですから，この成長の速度は非常なものです。しかるにひとたび生れるや，其の成長のテンポは緩やかになる。最初の12ヶ月で赤子は倍に成長する。次の12ヶ月では半倍，次いで四半倍，八半倍というように，先へ行けば行くほど成長は緩やかになる。もしも赤子が胎児時代の速度で成長し続けるなら，20歳の頃には鐘楼より高くなり，老年には雲に届くほどの巨人になってしまう。こうしたことは起らない。なぜか？

「おそらく未だ胎児の時代，性器が形をとり始める時代，概して赤子の内で性が分離しだす時代から，彼の内では伸長ないし上方への直線的成長の一部を割いて，未来の再生産のための担保が蓄積されていくのだ。この蓄積が多くなればなるほどすべては緩慢になり，成長も緩慢になる。さて担保は溜り，潜在力はできた――つまり資本金はできたが，未だ利子はもたらさない。つまり繁殖はない。あるのは繁殖への呼びかけ，空想，夢，恋心のみである」（同上 p. 78）。

担保の蓄積は，成長が緩慢になるにつれてますます密に生ずるようになるから，もしもこの蓄積を人工的に抑止したりすれば，有機体はいやでも変調を来たします。古きよき時代，「われわれの祖父や祖母たちが，われわれの父親たちを15歳か16歳で，母親たちを13歳で結婚させていた」時代に，萎黄病，貧血症，労咳等が生じなかったのは，「縦への成長」が折よく「横への成長」へと移行していたからです。日々新たに蓄積されゆく担保は，週に一回ないし二回の性交へと移行していた。つまり子供が生れた。

人間の縦への成長を止めることは誰にもできない。同様に，横への成長を押しとどめることも，神の車輪に棒を突っ込むことです。車輪はもちろん棒を折り砕き，先へ引きずってゆく。垂直方向への成長が止った人間にあって，横への成長を一週間以上抑えることは

できない。しかるに禁欲主義は言う，「三年間慎め」（教会の懲罰），「永久に慎め」（修道生活），「兵士は慎め」，「学生は慎め」等々。これはキリスト教諸民族の結婚に関する法が，すべて修道僧たちの教唆によるものであるか，あるいはそれが世俗の起原を有する場合でも，禁欲主義的教唆の残滓と偏向を帯びたものであるからです。

この偏向は，「カトリシズムとその偏向に抗して興った」ルター主義にすら，さらには公平無私たるべき医学にすら入り込んだ。このことは，例えば，買春とオナニズムとどちらがよいかという医学上の論争にも現れている。識者たちは声を揃えて，「男には25歳まで，女には20歳まで，結婚を禁じるべきだ」と言いますが，その彼ら自身著書の中では，オナニズムが通常14～16歳で始まることを認めているのです。彼らは言う，「結婚は勉学にとって障害であり，兵役にとって障害であり，労働者と貧乏人にとって破産である。いっぽう買春は，これらすべての社会的身分にとって，また離婚した者たち・鰥夫たちにとって，性的交わりの自然にしていささかも非難に値しない，しかも安価で便利な形態である――ただ，こっそりやること」（同上 p. 81）。

これに対しローザノフは早い結婚を提案します。男女のギムナジストにとって，合法的に結婚することがいかなる恥であるというのか。子供たちをめぐる苦労，将来の収入についての配慮等々は，これら若者たち・少女たちの内に，父親として・母親としての貴い心情を目覚めさせ，彼らを義務感と責任感ある人間へと鍛えるであろうに。

8

ヨーロッパの結婚と家族は，キリスト教ゆえに救いようもなく損なわれているというのがローザノフの確信であり，その対極として彼が称揚するものは，主として，旧約に基く古代ユダヤ世界の性生活です。

「横への成長力」は，その有機体の有する成長力一般に対応しており，個人によってさまざまですが，この多様さは，ローザノフによれば，その個人が受胎される際のエネルギーの差に由来している。古代ギリシア人たち，古代ユダヤ人たち，こんにちの回教徒たちに見られる卓越した健康と美は，彼らにあっては夫婦が別の天幕に離れて住み，夫婦生活は妻への夫の訪問によって営まれることと関係がある，というのです。その場合性交はかくも優しく甘美で，多くの緊張とエネルギーを孕む。それに反し，ロシア人の国民性に見られる幾分オブローモフ的性格は，夫婦が毎夜同衾することに由来すると見てほぼ間違いない。この場合子供は夥しく生れて人口は増えるが，子供たちは虚弱で，生気と才能を欠く。嵐はないが，いつも雨が降っているようなものです。しかるに，才能，美，力，生命力等は，嵐からのみ生れる。

卓越した天才から生れる子供たちがしばしば無能で，低い精神性しか示さないのはなぜかという問いに答えて，ローザノフは面白い説を述べています。性行為の最後の瞬間に起こる「意識の喪失」とは，魂の，知性の，人格の消失ではない（もしそうなら人間は死んでしまう）。そうではなくて，これらすべてのものの精子への転移である。人間の全精神，彼の個性全体が，その輝きで精子に滲透する。ところが「過剰な」天才たちは，大抵しかるべき「自己の忘却」をもってこの行為を遂行できない。行為中彼らの魂は頭の中に残り，精子は魂を欠いた状態で，単なる生物学的受胎の酵素として，母親の胎内へ移行すること

になるというのです。

力と才能は嵐から生れる。ユダヤ人の安息日とは，この嵐を保証するための賢明な制度でした。ユダヤ人の安息日は，金曜日の日没から土曜日の日没までを指し，その中心に位置するものは金曜日から土曜日にかけての夜であり，ここでは「すべてのユダヤ人の古くからの敬虔さが夫婦の行為を要求する」（因みに，ローザノフが通常の夫婦生活において週一回の性行為を推奨するのは，安息日の理念に示唆されてのことです，ルターは週二回ないし三回の性行為を想定した）。「安息日を憶えてこれを聖潔すべし」（出エジプト記20.8）とは，安息日には何もするなという意味ではない。すべての業を六日間にすませ，七日目は心置きなく夫婦生活に捧げよという意味です。

モーゼの十誡で，安息日の誡命に続いて「汝の父母を敬へ」とあるのも，意味のないことではない。ローザノフによれば，ここに現れているのは，われわれ自身新たな両親たることによってこそ，父母への敬意は表明されるという思想なのです。父母への敬意は，わたしの両親がそれによってわたしの両親となった行為を，わたし自身が反復することによって表明される。両親を敬うことは，わたしを生んだ両親の行為を敬うことであり，この行為の内に喜びを見出すことだ，というのです。

かくして安息日は守られねばならない。しかし法は時として侵されるものであり，また侵されることがなければ，法は死せるものとなってしまう。それゆえユダヤ人には安息日と並んで，神殿での朝のタミダ，つまり「罪を贖う犠牲」の制度があった。

タルムードでは，性交の無垢は(1)健康，(2)若さ，(3)労働次第であると言われている。また「夫婦は若い間は，自由な時間があれば(つまり労働で疲れていなければ)毎日性交する」とも言われている。安息日が死せる法となれば，それはイスラエルの民の口と心を堕落させるでしょう。ちょうど宗規の定めた結婚についての死せる法が，キリスト教諸民族の口と心を堕落させたように。「安息日は口に虚言を，心に狡猾さを，顔に偽善を押し付け，意志に厚顔な自己矛盾を強いるであろう」(p.86)。金曜日から土曜日にかけての夜まで性行為を慎むことは，守るべき理想です。しかしこの理想が守られなかった時，イスラエルの若い夫婦は神殿へ赴き，「罪からの浄めのために」二羽の鳩を犠牲として捧げたのでした。こうしてエホバの子等は，自らの父の前に罪なきものとなった。もしも彼らが次の夜も我慢できず，再度安息日を蔑ろにしたなら，その時は再度犠牲を捧げればよい。

そもそも成長が止らないように，成人の体内での精子の分泌は一刻も止まることがない。六日間で(安息日の理念によれば)，二，三日で(ルターによれば)，一昼夜で(無為の若者の場合)，はては数時間で(医学が引く事例の場合)精子は体内に満ち，性交への欲求は意志に関わりなく人を苛み，魂を圧迫します。その場合もちろん性交は行われねばならず，朝のタミダもまたなされねばならない。安息日が幾分蔑ろにされたことに変りはないから。

ユダヤ人には安息日ばかりではなく，「安息年」もありました。13～16歳の若者たちは両親に生活を保障され，懸念なく繁殖しつつ，結婚の安息年を通過しました。この年齢では体内に非常な担保が蓄積されますから，若者たちにとっては毎日が安息日となる。これは言わば「安息日」的精力であり，「安息日」的年齢です。

安息日と朝のタミダという法だけを見ても，これが結婚に関するすべてのキリスト教的法より賢明で優しいことは明かだ，とローザノフは言います。キリスト教的法は，若い無垢な幸福への敵意から流れ出たものだ。ユダヤ人の法はすべて割礼に発し，割礼の精神の

内にある。キリスト教徒の法はすべて去勢に発し，去勢の精神の内にある。

9

最後に，結婚のいかなるノルマにも収まらない事例，医学が報告する事例，ローザノフが性の＋８＋７＋６に分類する事例ですが，これにユダヤ人はどう対処したか。

民衆の内に虚言への習慣を植えつけないために，彼らは二つの大いなる制度を有していた。すなわち，夫の性的力の並外れた緊張は，法により祝福された「多妻制」の内に解決を見出し，女の性的力の並外れた緊張は，「聖なる娼妓」の制度により解決されたのでした。「聖なる娼妓」とは先に触れたエジプトの「聖なる娼婦」と同じものです。彼女たちは通常の結婚生活への無能力ゆえに，他のすべての女たちのようには嫁に行かず，個人への嫁入りではなく，民衆全体への「聖なる」嫁入りへと自らを捧げていた。預言者のひとりは神の命に従ってこうした娼妓との間に子供を作り，そのことを自らの預言書で語っている（ホセア書）。当時は少女たち，寡婦たち，離婚した女たちのうち最も生気に満ちた女たちが，堂々と娼妓になったのであり，ユダヤ人は彼女たちを「イスラエルの妻」と呼んで神殿に住まわせたのです。彼女たちとの性行為は，彼女たちをも，また彼女たちを訪れる男たちをも，何ら貶めるものではなかった。ちょうどわれわれの結婚が誰をも貶めないように。

こうして，両性の並外れた性的緊張に適切な河床を提供することで，民衆の健康は性の病から永遠に保障された。結婚のキリスト教的形態にあっては不可避な性の病から保障された。水は小川を，河を，滝を流れる。三者はどれも美しい。もしも各々が個別に存在し，互いに入り混じることさえなければ。いっぽう，キリスト教的な狭い去勢的結婚にあっては，滝は小川に落ち，小川を破壊してしまった。或る種の夫たちは売春婦のところへ出かけてゆき，或る種の妻たちは地位と体面を保ちつつ売春をするようになった。ここではすべての境界が入り交じってしまったのです。

10

流動する性的緊張という理念は，性における所謂倒錯現象を解明します。

結婚とは，性行為とは，男の本性と女の本性が互い同士の内へ入り込み，滲透し合うことです。人は誰しも父親と母親の結合から生れてきたのであり，両者の細胞から成っている。受胎の最初の日から，つまり胎内での生とのちには胎外での生の全期間を通じて，有機体の内部には，ちょうどアコーデオンの伸縮にも似た性的振動が存在するのであり，その一半は女性のもの，もう一半は男性のものなのです。つまり人間は本来的に両性具有であり，有機体の生命力，活気，輝きはここに由来する。11～13歳頃まで，両親に由来する二つの部分は有機体の内で互いに固く結びついており，それゆえ非活動的です（幼年期，少年期初期）。

11～13歳頃から，少年の内部では，外的性器に対応する一半が優勢になり，反対の一半は干上がり，小さくなってゆく（もっとも，完全に消失することはない。そうなったら人間は死んでしまう）。少年は，それまで自らの内に見出していた女性を，今や自らの外に

探し，彼女を見出し，彼女と結婚する。かくして外的な性的融合が成立する。通常1000人中995人まではそうです。しかし少数の場合，1000人中5人の場合，どちらの一半も生涯優勢になることがない。その場合外的結婚は不可能となる。そうした人間は，本質的に言って，終生少年のままですから。

最後に，1000人中１人(おおよそのところ)の場合，外的性器と反対の側が優勢になる。つまり男の性器をもちながら女であったり，女の生殖組織をもちながら男であったりする。その場合外的性器は無駄に与えられているわけで，何の役にも立たず，完き除去(例えば外科的除去)に価する。

ローザノフがソドミヤ содомия (英 sodomy，仏 sodomie)の事例に関心を抱くのは，性とはもの(例えば外的性器)ではなく，われわれの内なる或る種のうねりであることを，この現象が明瞭に示しているからです。

性とはわれわれの内で波立つ光と熱であり，これが分れて「男性的なもの」となれば女性をめざし，「女性的なもの」となれば男性をめざすわけですが，この波は自らの内でもつれ合い，錯綜し，屈折し，逆行し，絶えず揺れ，震え，光芒を放っている。性器はこの性への付加物にすぎない。有機界にはこの器官の完き欠如はありうるのであって，このことは，外的性器が性生活にとって必ずしも最重要の意義を有してはいないことを示している。魚には外的性器は存在せず，性器の結合としての性交も存在しない。しかしその受精はとりわけ荒々しく，受精への嫉妬深い志向は存在する。性とは器官ではなく，有機体全体であり，ただしこの場合も，ものとしての有機体ではなく，「うねりと炎」，「脈拍とリズム」としての有機体であって，諸器官はこれに従属するのです。

性は性的活動の器官に先行する。性器があるから「性交したくなる」のではなく，性器以前に，性器には関わりなく「性交したくなる」のであり，そこで「欲望の対象として相応しい器官が存在するかどうか」が問題となる。ソドミヤとは，「欲望の対象として相応しい器官が存在しない」場合のことです。欲望は器官の如何に関わらず存在し，人間の内で燃え続ける。「燃えるものは何もない」，しかし「燃えている」――これがソドミヤの本質です。「咽喉が渇く」，しかし「咽喉も口もない」――こういうことはあるのです。渇きは口や咽喉によって惹起されるものではなく，血から生ずるもの，血液中の固体と液体の割合から生ずるものですから。そこで，「それなら仕方がない。肛門から水分を補給しよう」ということになる。例えば受身の男色者の場合，彼の有機体は必ずや男性の精子，男性特有の精気を必要としている。しかるにこれらの通常の受容器官，絶対的ではないが通常の受容器官（膣と子宮）が存在しない。そこでありとある方法による「男性的精気」の補給が図られることになる。ソドミヤの形態がおそろしく多様なのはこのためであり，このことは医師たちによる「倒錯例の集大成」が証するとおりです。

「受胎にあってはひとつの有機体が他の有機体によって『燃え立つ』。この『燃え立つ』ことの遍き不可避性は，『世界が元来燃えている』こと，『生が元来燃焼に他ならない』ことに由来している。どうしてこれを止められよう。どうしてこれに『燃えるな』と言えよう。それならば，どうして諸君は男色者に向って『男の火によって燃え立つな』と言えるのか。彼は『燃えない』わけにはいかないのだ。なぜなら生とは火であり熱であるのだから。〈……〉医学と法律は，或る種の肉体が『湿ったままに留まり』，『燃え上がらない』ことを欲している。しかしこれは鳥を蜥蜴に，人間を魚に変えること，概して温血動物を

冷血動物に変えることであって，医学や司法の手に余る。男色者の内に女性への渇望を目覚めさせる手段が見つからない限り，彼らには彼らなりの性交をさせておくがいい。これは『点火』にして『受胎』である。点火なくして火はなく，火なくして生はなく，受胎なくしてそもそもいかなる成長もない。受胎は個々の性交に先行し，個々の性交以前に存在するのだ。『受胎したい』というのは全自然の叫びであり，生きものからこの叫びを摘み取るこ権利は誰にもない」(同上 p. 225)。

11

性とは一種のうねりないし波動であり，ゼロから無限へ(魚は年間に数限りなく産卵する)，マイナスからプラスへと流れゆくものです。それゆえ元来「男性的なもの」とか「女性的なもの」とかは全然存在せず，存在するのは「渦巻く衝動」であり，各人の内には「あらゆる可能性」があるのだ，と言うことも完全に可能です。しかし通常は各人の内で何らかひとつの衝動が勝っており，雌への衝動が勝るとき，われわれはこれを男性的体質，男性的渇望と呼び，雄への衝動が勝る時，われわれはこれを女性的体質，女性的渇望と呼ぶのです。しかし「勝っている」ということは，「他のものと共存している」ということです。誰の内にもこの「共存」はあるのであって，男色者の内にたとえ百万分の一なりと正常な性交が宿っているように，正常な男性の内にも百万分の一の男色的性交は宿っている。百万分の一かもしれないし，千分の一かもしれない。ことによったら百分の一，さらには十分の一，はては殆ど三分の一かもしれない。

この上なく当り前の友情，周囲の人々への無関心な態度とは異る何らかの「共感」，功利的ではない，欲得抜きの「何故か気に入った」等は，ローザノフによれば，既に千分の一，百分の一のソドミヤを含んでいる。ソドミヤとは，波立つ性の流れから必然的に生じてくる現象である以上，これは当然です。ソドミヤとは「お茶のコップに落ちて溶けだしているが，未だ完全には溶解していない砂糖」のようなものだと，ローザノフは言っています。そして砂糖が茶に味を添えるように，ソドミヤも生全体に甘さ，心地よさ，軽さ，「社会性」を伝えるのだ，と。

12

流動する性の諸現象のうちでとりわけローザノフの関心を惹くのは，性の±0の場合，つまり性的無関心の場合です。『月光の人々』という著書は，元来がこの現象の解明に充てられたものです。

性の±0とは，数の上では稀な現象ですが，性的力の増減という流れの中では全く自然な現象です。反生殖的理念は反生殖的本能なくしては興りえませんが，この本能が興るのは，流動する性が解剖学上対極的な異性との結合をめざすことから，同性との結合をめざすことへと移り行く地点においてです。運動が前進から後退へ移行する際一瞬の静止点があるように，移行のこの地点において性の完き否定が出現する。性は異性も同性も完全に不必要なもの，余計なものと感じられる。内的ないかなる心理もこれに応ええない。この深く平穏な状態は，幼年期と少年期初期のそれに喩えることができます。人々は通常この

短い一時期を経過して，異性との結合という広い道へ，あるいは同性との結合という狭く困難な道へ歩み入って行くのです。

この状態は太古の昔から人々を驚かせました。この状態にある人間は，「自らに適う」女ないし男を見出すという，万人に共通する重荷・煩労を背負っていない。これは永遠に夫婦とならないか，夫婦となっても童貞・処女として生涯を送る人々であり，「童貞なるがゆえに女に汚されぬ者」，天国へと運命づけられた「生れながらの閹人」であり，その数は人類全体から見ればささやかな数十四万四千人です。世間はこの種の人々を，人間のこの上なく苦しい屈辱的な煩労（なぜなら自らの女ないし男を見出すことは，常に阿(おもね)りや諂(へつら)いと結びついているから）を知らない存在，平穏で超越的な天使として讃えるいっぽう，広く尊敬され人望を集める人々がこのカテゴリーに属していることに，とんと気がつきませんでした。

ローザノフは「ソドミヤ」の語を非常に広い意味で使用しています。「ソドミヤ」は本来，男色，獣姦等，反自然的性交を意味する言葉ですから，ローザノフが性の－1－2－3に分類する性倒錯の諸事例を指すには適当でしょうが，性的無関心たる±0を指すには不適当であるように思われます。しかしローザノフは，このどちらの場合にもソドミヤの語を使用している。彼は一方ではこの語を狭義の性倒錯の意に使用すると同時に，他方ではより広義の，性倒錯と性的無関心を含めた「反生殖」の意味でも使用しているのです。性倒錯も禁欲も，生殖に関わらない（子供が生れない）ことでは規を一にしており，これを彼は「ソドミヤ」の語で一括したのです。彼はソドミヤの概念を「性倒錯」から「反生殖」へ拡大した，とも言えます。この広義のソドミヤの場合，彼はしばしば「精神的ソドミヤ」という言い方もしています。

ローザノフによれば，楽園で蛇がエヴァに囁いた文句とは，ソドミヤ的なものであったのです。楽園追放の神話についてこんにち修道院では，蛇がエヴァを唆してアダムを誘惑させ，かくしてアダムとエヴァの性交は成ったのだと信じられており，その場合，「林檎」は「女の魅惑」，「官能性」の寓意と解されている。

ローザノフは，最初の夫婦の楽園での生活が一日しか続かなかったという，タルムードの素朴な説明を採用します。そもそもアダムとは，イコンに描かれるような成熟した骨ばった大人ではなく，青年になりかかった少年である。エヴァの創造は，彼の官能的欲求の目覚めに応えて行われた。神は楽園で彼の「胸の燃ゆる」のを許すわけにはいかなかったから。官能によりエヴァを受け容れるべく準備されていたアダムは，彼女を一目見るや，愛に満ちた周知の叫びを発します。最初の夕闇の到来とともに床入りは行われ，結婚は成就したことでしょう――もしも夕闇に先立つ時刻，蛇がエヴァを誘惑しなかったならば。

アダムとエヴァの物語は，若者たち・処女たちの成長一般の詩的形象でもあります。結婚適齢期以前の少年・少女たちが，ごく短期間の同性愛期を経験することはよく知られています。性に関して蛇がエヴァに囁いたこととは，他でもない，こうした中性的・ソドミヤ的なことだったのです。「産むな，繁殖るな，天なる天使のごとく生きよ，処女の愛をもって互いに愛せよ」。つまり蛇は，性交のためにとエヴァをアダムに与えた神の意志に逆らって，少年・少女のままに留まれ，不可侵の処女性の道・修道生活の道を歩め，これこそが精神的高みと至福をもたらすであろうと誘惑したのでした。

もしも二人が繁殖に関する神の誡命を守り，楽園で急ぎ遅れず性交していたならば，二

人は楽園からの追放を避けえたことでしょう。しかし二人は遅れをとり追放された。彼らは夜までには楽園を逐われたのであり，それゆえ性交は楽園の外で行われた。彼らはここ地上でようやく，神の意志遂行の遅延を取り戻さんものと，急ぎ「蛇の頭を砕き」始めたのでした。

13

キリスト以前であろうと以後であろうと，世俗の書物の中であろうと宗教的書物の中であろうと，「肉欲」，「罪」，「不浄」の語が聞かれるところには，必ずやソドミヤの感覚がある。この感覚ゆえに，精神的ソドミートにあっては，脳に始り視覚，聴覚，嗅覚に至るまで，すべてが繁殖する子沢山な雄におけるとは別様なのです。精子あるいは卵子の組成と生命が，その保持者たる男あるいは女に，豊かで複雑な心理を賦与するものならば，永遠の壊ちえぬ童貞ないし処女から流れ出る心理がどれほど破格なものか，思い浮べることさえ難しい。

そこにわれわれが見るものは，いずれにせよ男性的なものでも女性的なものでもなく，両者の奇妙な混交ないし不在であり，要するに第三の何か，「第三の性」です。これはアダムとエヴァとは異なる第三の人間であり，本質的には，そこからエヴァが出て来る以前のアダム，原初の完きアダムです。

「彼は『繁殖し始める最初の人間』より旧い。彼は世界をより旧い眼で眺める。彼は自らの本性の内により旧い基底を有しており，世界のより旧い昔話と，大地のより旧い歌を憶えている。宇宙発生論的次元と宗教的次元で，彼は繁殖に先行する。繁殖はあとから遅れてやって来て，これを覆った。ちょうどこんにちの地層がデヴォン紀ないしジュラ紀の地層を覆ったように」（同上 p. 101）。

彼が自らの内に帯びているこの「一層旧い歌」ゆえに，彼の全本質は確固とした果てしない抵抗力を獲得します。彼らがこの地上にあって常時いかに少数であろうと，つまり世の終りに至っても十四万四千人にすぎずとも，彼等の作品は規模において限りなく，強固にして永遠です。彼が作曲家であればその音楽は特別なものとなり，彼が画家ならその絵は特別なものとなる。彼等の哲学が特別なものであったことは，クサンチッペの不首尾な夫ソクラテスと，古代世界の老いたる修道士にして永遠の童貞者プラトンが，これを証明している。

14

性的緊張が＋１＋２＋３等々の人間なら，性行為の内に健康，美しいもの，有益なもの，道徳的なもの，高貴なものを感じ，子や孫が生れることを待望する。しかるに精神的ソドミートたちは，性行為を恥ずべきもの，汚らわしいもの，さらに一般化して罪深いもの，神に悖るものとしてしか思い描くことができない。正常な人間（性が＋１以上の人間）なら，倒錯した性関係のことを見たり聞いたりすれば，強い嫌悪感を覚えるのが普通ですが，これと同じ嫌悪感，神秘的な恐れを，性的力が±０の人間は自然な性交に対して，よくある結婚に対して抱く。「誰かがこれに嫌悪感を抱かないとは，到底考えられない」，「誰か

がこれを罪の意識なしに行えるとは，到底信じられない！」彼らは，「誰もがこれを厭うべきものと感じ，誰もがこれを恥じる」と確言します。誰もこれを恥じてはいないにもかかわらず。彼らは，「神はこれを禁じた。神はこれを欲しない」と断言します。聖書の第一頁には「生よ繁殖よ」の句があるにもかかわらず。そして宗教文献には，この一致した意見を乱すような声はひとつとして聞かれないことから，全宗教文献がひとえにこの源泉から流れ出ていると結論できる。「宗教的なものの本質」とは「ソドミヤ的なものの本質」なのです。

もっとも，すべての宗教作家がその確言において誠実であるとは言えません。なぜなら，彼らも大抵は他の人々と同様繁殖しており（例えばロシア正教会の白僧，つまり下級聖職者たち），概して，ひとつの階層全体がこの稀なカテゴリーに属するということはありえないからです。しかしソドミヤ的嗜好に内的には同意しえない者も，この階層の一員であれば，その法と伝統に従ってソドミヤ的主張を反復せざるをえないでしょう。

キリスト教が性的力±０の系列に属するものであることは，福音書冒頭の処女懐胎の挿話から，また，この挿話が福音書のまさに入口に置かれていることからも見て取れます。ここからキリスト教は始り，これを認めよと要求しつつ登場したのでした。処女懐胎とは「奇蹟」，ありそうもないこと，理性の受け容れえぬこと，言わば性における２×２＝５ですが，この「奇蹟」に同意しない限り人はキリスト教徒ではなく，「授洗していない」のです。これを受け容れこれに従うや，人はキリスト教徒であり，授洗し，神の国に入る。

キリスト教の本質とは性の±０であり，このことの内にキリスト教の何かではなくすべてがある。人が性の内に何らかの数値を置けば，つまりプラスでもマイナスでも，あるいはその何十分の一かでも置けば，人はキリスト教を斥け覆すことになる。教会はこのことにすこぶる固執しており，イエス・キリストないし生神女の内に何かしら「真に性的なもの」があった，つまり「処女としての女」，「教師としての男」以上の「真に性的なもの」があったという断言・仄めかし・想定にもまして教会を侮辱するものはないのであって，事実これにもまして教会を覆すものはないのです。

「イエスには兄弟があった」と福音書には言われています。「いやいや！――と教会は叫ぶ――生神女は修道女であった。本質において修道女であり，ただ形式的にそうではなかっただけだ。彼女は修道女以外の何者でもありえなかった。さもない限り，この世の全く新しいなにものかとしてのキリスト教は始まらなかったろうから！」そして事実，福音書を深く読み込むならば，福音書が密かに，文字どおりの意味においてではなく自らの精神において，教会のこの叫びを支持しているばかりか，恐るべき自信をもってこれを絶叫していることが分ります。もちろん生神女は修道女であり，彼女の息子は修道士であった。本質的に，そうに違いなかった。教会が熱心かつ悲痛に強調するとおり，イエスが懐胎されたのは，男の肉欲からでも女の肉欲からでもなかった。

処女懐胎ということになれば，イエスは精子なくして生れたことになる。これこそ新たにして独創的なことであり，それゆえにこそ人々は彼を「神の子」，「神人」と呼び，そのようなものとして彼を受け容れたのでした。イエスの形象と人格の内に「精子的性格 семенность（精子を有すること）」が持ち込まれるや，この人格は無と化す。無精子とは，性の±０ということです。つまり「生きているが繁殖しない」という，かの謎めいた現象のことです。これに同意するや，人はキリストを「新たな神」として受け容れたのであり，

同意しなければ彼を斥けたのであって，キリスト教徒ではないのです。

15

教会を形成するものは，第三の性です。

第三の性にあって，子供は決して生れない。家政は決して生じない。生ずるのは，住居としての僧房，洞窟，露営地に過ぎない。彼ら孤立者にとって血縁は存在しない。「兄弟や姉妹がわたしにとって何だ？　わたしにとって重要なのは弟子たちである」。家族と血縁の消滅により，社会生活の型は深刻な破壊を蒙るでしょう。心理的根源において破壊を蒙る。それに劣らず破壊されるのは，歴史の型です。子孫を残さぬ者に未来は必要ない。あとに続く人類の運命は，この人類の利益という観点からではなく，これら孤立者たちのグループの利益，身内なき人々の精神的結束・精神的継承という観点から思い描かれる。それゆえこのグループは人類の内にあって，人類に抗して，人類の根そのものを否定しつつ発展してゆく。

血族・種族・民族はない。未来はない。進歩は必要ない。いったい何が残るか？　とりわけ，大いなる精神の燃焼と高度の潜在的能力にとって，何が残るか？　精神的なものの突発です。民族共同体や進歩の広大な領域から離反すること，これらに対し自らの内面の眼を閉ざすことは，その人間の内に視力の並外れた明晰さと遠視力，並外れた高度の思考力を呼び起さずにはいません。「肥えた夫婦たち」はたとえ数千人・数万人かかろうと，この種の数十人に敵わない。「肥えた夫婦たち」もそれなりの力を有していますが，それは精神の王国における力ではなく，その敬虔さは僧房の敬虔さではありません。

いかに奇妙に聞えようと，ヨーロッパ社会はその深い超自然性とイデアリズムを，修道生活に負っているのです。ヨーロッパ文明の精髄は，全く世俗のものであれ，無神論的で反キリスト教的なものであれ，例外なく，すべて修道院の僧房から出てきた。修道制度を斥けたルター主義は一切の形而上学を喪失しましたが，これは修道制度のみがキリスト教の全形而上学をなしていたからです。キリスト教における余のことはすべて合理的に説明可能であり，当り前です。修道制度のみが理性に照らしても，「生よ繁殖よ」という誡命に照らしても，説明不可能です。そしてこれこそが旧きものから新しきものへの歴史の転換点をなし，「キリスト教時代」を創始したのでした。

これなくしては何もない。あるのは善意の人々，良識ある人々，交わるに快適な「よき人々の集り」にすぎず，これがなぜ「特別なもの」としての教会を形成するのか分らない。教会とは単なる「信者たちの集り」ではない。これは無数の葉によって織り成された単一の伝統であり，これらの葉は単一の種子から生い出たもので，その種子とは「種なし（精子を欠いていること。大方のヨーロッパの言語で，種子は同時に精子を意味する）」のことです。教会という「特別なもの」は修道僧から始まる。彼のみが形而上学的種子を蔵しており，この種子はその新奇さで人々の度肝を抜き，人々は奇蹟に対するごとくこれの前に跪く。この奇蹟とは，彼が女への関心を全く有しないこと，それゆえわれわれに全然似ていないことです。この隔絶ゆえに人々は彼を天使ないしデーモン，つまり人間より高所ないし低所にあるもの，いずれにせよ人間とはかけ離れたものと呼ぶのです。

修道制度の原理，「種なし」の原理が変ることなく保持される限り，教会はそっくりそ

のまま保全される。修道僧たちがいかに無学で粗野であろうと，また修道制度の内部に驚くべき性的放縦があろうとかまわない。千人の堕落した修道僧たちの間にひとりでも義しい修道僧がいれば，はては千人と一人の修道僧が皆堕落していたところで，キリストの王国は残る。いつか新たな者がやって来て，この原理を実行するでしょうから。その時は瞬時にして教会全体が，その特別な精神の内に再興されるでしょう。いっぽう千と一人の幸福な家庭人は，たとえ彼らがアブラハムのように高潔であったところで，旧約の王国を構成するにすぎず，新約の王国の一片をも構成することはないでしょう。

16

今やローザノフのかかえていた対キリスト教アンビヴァレンツのいかなるものであったかが，幾分明瞭になったと思います。

彼は終生結婚と家族を擁護し，キリスト教の修道精神を弾劾し，旧約のユダヤ世界を称揚してきました。旧約こそ聖なる子作りの宗教であり，ユダヤ教こそすぐれて性的な宗教だからです。

確かに，イスラエルの民のもとにも，しばしばモロク崇拝やアシタロテ崇拝は見られました。ソロモンもこれら異教の神々に崇邱（たかきところ）を築いた。こんにちの歴史家たち・神学教師たちによれば，旧約に登場するイスラエルの王たち・預言者たちとは修道僧に似たものであって，絶えず斎戒し絶えず祈っていたのであり，「厭うべきモロク崇拝」は彼らをこの旧約的な修道精神から引き離し，「女による汚瀆」へ押しやったことになっている。

ローザノフによれば事実は正反対でした。モロクやアシタロテに仕える祭司たちこそ修道尼や修道士だったのであり，イスラエルの不信心な王たち，イゼベルといった王妃たちは，自らの宮殿を修道尼と修道士で満たしたのです。イスラエルの民にあったのはひとえに多産の宗教であり，彼らに見られるモロク崇拝・アシタロテ崇拝への逸脱とは，修道精神・無婚精神が彼らのもとへ侵入せんとする絶えざる試みに他ならなかった。フェニキアで，シリアで，既にキリスト教の遥か以前から興っていた修道精神は，これらの地から，豊饒と多産のエホバの神殿へ闖入しようと絶えず努めていたのであり，これに対してイスラエルの民と預言者たちは，王たちをも巻き込んで「否」と言ったのです。修道士たちの試みは，当時は成功しなかった。それが成功したのは，エホバの「宮の一つの石も石の上に遺らぬ(マタイ伝24.2)」ようになってからのことです。

旧約と新約を一巻の書に糊付けして聖書と称したことは，ヨーロッパが良心に負うべき最大の破廉恥だと言ったのはニーチェですが，ローザノフにとってもユダヤ教とキリスト教は対極的な宗教であり，ユダヤ世界にあってキリスト教は全く新しい何ものかとして登場したのでした。

キリスト教は，旧約において忘れられ等閑に付されていた人々，特殊なカテゴリーの人々に，慰めと喜びをもたらすものとして登場した。特殊なカテゴリーの人々とは，これまでの生の概念を覆す人々，「生きているが繁殖しない」人々のことです。この現象は常に存在したのですが，それが異常，倒錯，偶然，畸形，呼び方は何でもいいが，要するに一種の病気と考えられていた間は，人々はこれに関心を向けようとせず，学問はこれを攻究の対象とはしませんでした。これが学問の体系を揺るがせなかったのは，ちょうど誤記が正

書法を揺るがせなかったようなものです。

しかるに今や，この「生体における繁殖の消失」がいささかも病理的現象・いつか過ぎ去る現象ではなく，繁殖と同様に正常で確固たる現象であり，ただ比較的稀にしか見られない現象であることが明かになったのです。今やこれにより「有機体をめぐる諸学問はその根底から揺らぐであろう。ちょうど琥珀を布で擦る時の稀な現象たる電気によって，物理学が揺らいだように」(同上 p. 274 注 1.)。

旧約の世界とは，言わばこの旧い物理学みたいなものだとローザノフは考えます。父なる神の創った旧約の世界は，実は未完成であった。息子がやって来て，「この世の子らは娶り嫁ぎすれど，かの世に入るに，娶り嫁ぎすることなし」(ルカ伝20. 34)と言った時，言い換えれば，「幸福なるかな，繁殖せざる者」と言ったとき，世界は完成したのだというのです。彼は繁殖への志向が本能なら，繁殖しないことへの志向もまた本能であること，反生殖的無婚現象もまた，生殖や結婚に劣らず形而上学的根源を有していることを，認めざるをえない。確かに各人の内には父親と母親に由来する両性があり，それゆえ各人は新たに性交することを欲するが，ただし絶えず性交するのではなく，部分的には処女と童貞のままでいることも欲するのであり，ここから精神が，魂が，心理が発生した。精神は，有機体が両性具有である限りにおいて現れえたのです。

ここにローザノフのキリスト教に対する根本的なアンビヴァレンツがあります。彼はキリスト教に深い反発を感じつつも，キリスト教が確たる存在理由と端倪すべからざる力を有していることに，同意せざるをえない。彼は終生このアンビヴァレンツから脱することがなかった。言い換えれば，彼は終生キリスト教と，半分しか和解することができなかった。

彼は『月光の人々』第二版への付録で，この書の初版を読んだ一読者の手紙に答えて，結婚には月光の人々の助力と補足が必要であることを認めています。ただし双方が己の分を守り，穏やかに，正確に距離をとり，互いに干渉し合わぬことが大切だと。

L'amour sexuel dans la pensée russe (VI)

V. Rozanov (3)

AOYAMA Taro

Rozanov publie en 1911 deux livres : «Face sombre» et «Gens de clarté lunaire». Le dernier expose le mieux la vision rozanovienne sur la sexualité.

Nous avons examiné quelques penseurs russes qui, malgré la diversité de leurs opinions, tous répugnaient le coït, tandis que le genre humain, le peuple silencieux, prouvait, non pas par parole mais par acte, qu'il ne répugnait point le coït, car il ne cessait de procréer. Rozanov parle pour ce peuple silencieux. Il dit que le péché, ce n'est pas procréer, mais défendre de procréer. Le christianisme n'a pas réussi à faire renonncer à la procréation, ce qui signifie son échec total, car selon Rozanov, le but du christianisme ne consiste qu'en cela.

La sexualité n'est pas une valeur constante, répartie à chacun en même quantité. C'est une valeur fluide et changeante, qui passe de négatifs à positifs à travers ± 0. Ce fait biologique permet à Rozanov d'expliquer des phénomènes sexuels, y compris aussi bien la religion que la perversion sexuelle. Le refus de procréation est un phénomène parfaitement normal dans ce courant vital de la sexualité.

Rozanov défendait toujours mariage et famille, préconisait la vie sexuelle juive et l'Ancien Testament, car le judaïsme est une religion de la procréation. Le christianisme est apparu en apportant joie et consolation à ceux qui étaient oubliés ou négligés dans le monde de l'Ancient Testament, c'est-à-dire, à ceux qui "vivaient, mais ne procréaient pas". Et maintenant on constate que cette "absence de procréation chez l'être vivant" n'est ni pathologique ni anormal, mais aussi normal que procréation. Cela veut dire que le monde créé par Dieu-Père était inachevé. Il s'est achevé quand le Fils est venu et a dit : "Heureux ceux qui ne procréent pas".

Rozanov reconnaît que le phénomène de célibat est aussi fondamental et métaphysique que celui de mariage, d'où vient son ambivalence vis-à-vis du christianisme. D'une part, il y éprouve de l'antipathie à cause de son monachisme, mais de l'autre, il en reconnaît la raison d'être et même l'utilité. Il constate la nécessité aussi bien de coexistence que de collaboration entre "gens de clarté lunaire" et gens mariés, mais il affirme aussi que les uns et les autres doivent se tenir à l'écart prudemment et gentiment, mais rigoureusement.

Cette ambivalence ne quittera jamais Rozanov.